

『現代音楽の最高傑作を選ぶ』

伊藤美由紀（2400文字）

今回は、第2次世界大戦終結1945年以降から現在までの現代音楽から、個性的な音響の10作品の傑作を選曲する。

まずは、前回の近代音楽の作品でも紹介したフランス人作曲家メシアンの弟子たちから始めたい。彼が、1966年にパリ国立高等音楽院の作曲家の教授になって以来、世界各国から作曲家達が彼に師事し、その後、各々国際的に活躍を行う。その中から4名の作曲家の作品を紹介する。

1) ブーレーズ《ル・マルトー・サン・メートル》(1953-55)：メシアンのもっとも初期の弟子であり、30歳の時のこの作品により国際的知名度を得た。シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》からの影響を受けており、ルネ・シャールの詩集から3つの詩を使用したアルト歌手と6つの楽器のための特殊な編成による。(推薦CD:ブーレーズ指揮、アンサンブル・アンテルコンタンポラン)

2) シュトックハウゼン《少年の歌》(1955-56)：聖書からのテキストを使用し、ボーイソプラノの声の録音と電子音による、ケルンの電子音楽スタジオで制作された初期の電子音響作品である。アコースティック音響と電子音を統合して制作するという試みは、当時、画期的な挑戦であった。音響的な試行のみならず、空間的な音の動きにも既に取りかかっており、5チャンネルのサラウンド作品として作られた。コンピュータが登場する前時代に、電子音を付加することで新たな音響の可能性を後世の作曲家に示唆した作品である。(推薦CD:ケルン電子音楽スタジオ制作)

3) クセナキス《メタスタシス》(1953-54)：数学者、建築家でもある彼は、その数学的知識を作品の中にも応用している。この管絃楽曲では、建築学的な理論に基づき弦楽器のグリッサンドの各々の傾きも計算され構築されている。この作品により国際的知名度を得る。その音色は、繊細であったり暴力的で攻撃的な轟音であったり、彼の経験した戦渦の緊張感を表しているような音響である。(推薦CD:モーリス・ルルー指揮、フランス国立管絃楽団)

4) ミュライユ《砂丘の精霊》(1994)：グリゼイと共にスペクトラル楽派の創始者である彼の初期の代表作品である。IRCAMで、コンピュータ支援作曲ソフトウェア「パッチワーク」の開発プロジェクトに関わっていた時期であった。この作品では、モンゴルのホーミー、チベットトランペット、チベット唱歌の

3種類の音響のスペクトラル分析の結果を作品の中に使用している。分析結果から、彼の洗練された聴覚により選択された音響を、アンサンブルと電子音響にオーケストレーションし再構築している。微分音は、スペクトラル分析の結果として使用される。複雑な音響であるが、繊細で美しい音色が彼の個性である。(推薦 CD:デヴィッド・ロバートソン指揮、アンサンブル・アンテルコンタンポラン)

次にスペクトラル楽派のきっかけとなり、影響を与えた、ミュライユ、グリゼイの前世代の作曲家2名の作品を挙げる。

5) シェルシ《Konx-Om-Pax》(1968-69): 1音を聴き込むというスタイルが、ミュライユ、グリゼイの倍音を分析して音色にこだわるというスペクトラル楽派に影響を与えた。この作品の最後の3部に、合唱が仏典からの音節「Om」を繰り返す。異なった音域、様々な楽器で、1つのピッチのまわりの音で作品を構築する。管弦楽の洗練された音色、微分音、特殊奏法の応用により、1つのピッチが複雑な音色で変容され、作品は昇華される。(推薦 CD:Accord レーベル)

6) リゲティ《アトモスフェール》(1961): 映画「2001年宇宙の旅」の中で楽曲の一部が使用されたことで、彼の名前が広まった作品である。彼が名付けた『マイクロポリフォニー』という密度の高い音構造で構築されている。全ての楽器がディヴィジで各々の音を演奏し、特殊奏法を効果的に使用し、複雑な音響を生み出している管弦楽作品である。(推薦 CD:Wergo レーベル)

更に異なった独自の方法により、個性的な音響世界を生み出している4名の作品を最後に挙げる。

7) 武満徹《ノヴェンバー・ステップス》(1967): 今年に武満徹没後20周年ということで、世界中で彼の作品を聴く機会が増えるであろう。当時のニューヨーク・フィルの音楽監督であるバーンスタインにより委嘱され、この作品により彼の国際的知名度が上がった。オーケストラに邦楽器(尺八、薩摩琵琶)を使用した最初の試みであり、古典作品では使用される事のない特殊奏法を、頻繁に効果的に使用している。日本的な間のタイミングを重視し、2台のハーブを邦楽器の後方に配置するなど空間的な音響の配慮も効果的に考慮されている。邦楽器のカデンツァ部分は、図形楽譜で記譜されており、奏者に自由が与えられている。後世の世界中の作曲家達に邦楽器の現代音楽への応用を知らしめた重要な作品の一つである。(推薦 CD:小沢征爾指揮、トロント交響楽団、鶴田錦史、横山勝也)

8) サーリアホ 《Du cristal... à la Fumée》 (1989/90) : フィンランド人女性作曲家。IRCAM で活動していたこともあり、初期のものは、様々な楽器とエレクトロニクスの組み合わせによる繊細で美しい音響による作品である。この作品は、オーケストラとエレクトロニクスによる、同じアイデアで制作された2つの管弦楽作品である。現代音楽での女性作曲家の活躍も特筆に値する。(推薦CD: エサ・ペッカ＝サローネン指揮、ロサンジェルス・フィルハーモニック)

9) ラッヘンマン 《グラン・トルソ》 (1972) : 彼独自のユニークな様々な楽器の特殊奏法の限界まで挑戦し、個性的な音響で構成される彼の作品は「楽器によるミュージック・コンクレート」と言われたりする。弦楽四重奏によるこの作品は、弦楽器の生み出すあらゆる雑音を駆使し緊密な構造による作品である。(推薦CD: アルディッティ弦楽四重奏団)

10) シャリーノ 《シャドウ・オブ・サウンド》 (2005) : 彼も独自の特殊奏法による個性的な音響で知られる。沈黙に近い緊張感のある音響により作品を構成する。特にフルートの特殊奏法へのこだわりは強い。この管弦楽作品でも、フルートを中心に息、空気音により作品が構築されていく。(推薦CD: シャリーノ・管弦楽曲集)

戦後、テクノロジーの発展によりコンピュータの応用は、音楽の世界でも必須となっており、演奏とテクノロジーの様々な関わり方により多様な作品が生まれつつある。著者と同年代、若手の作曲家による傑作が現在も生まれつつある。現在活躍している作曲家たちの作品を通して最新の現代音楽にも目を向けて欲しい。